

平成22年5月17日現在

研究種目： 基盤研究(C)  
 研究期間： 2007～2009  
 課題番号： 19520337  
 研究課題名（和文） ハイダ語の文法記述と言語類型論的特質に関する総合的研究  
 研究課題名（英文） A grammatical description of the Haida language from the typological perspective  
 研究代表者  
 堀 博文 (HORI HIROFUMI)  
 静岡大学・人文学部・准教授  
 研究者番号： 10283326

## 研究成果の概要（和文）：

本研究課題は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州で話されるハイダ語の文法の全体的な理解を得ることを最終的な目標としつつ、その過程において、同言語の様々な文法事象を言語類型論的な視点から考察することを目的とするものである。本研究課題を通じて、言語類型論的にみて最も顕著な特徴である分裂自動詞性にかかわる動詞の意味特徴が〔動作性〕と〔制御性〕で記述できることを示すと同時に、ハイダ語の動詞複合体を形成する要素の承接順序と個々の自在性などの問題を明らかにした。

## 研究成果の概要（英文）：

This project aims to describe and consider various aspects of the morphosyntax of the Haida language (one of the aboriginal languages in the northwest coast of British Columbia in Canada) within the context of linguistic typology. Through this project which has been carried out for three years, it has been clarified that split intransitivity which is one of the remarkable typological traits of the language can be described with two semantic features [agency] and [control]. In addition, verbal elements which consist of verb complexes in Haida are described in terms of their versatilities and their positions they occupy within the complexes.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：ハイダ語, 北米先住民諸語, 言語類型論, 記述言語学, 活格タイプ

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題の対象であるハイダ語は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州の北西海

岸地域で話される北アメリカ先住民諸言語のひとつである。話者は、主に70歳代以上の高齢者に限られ、流暢に話せるとみられる

話者は、おそらく 50 名に満たないものとみられる。

そうした状況にあって、ハイダ語の記述は、20 世紀初頭に幾分まとまった研究がなされはしたものの、その後、散発的なものは除き、ハイダ語の全体を解明する取り組みは、ほとんどなされてこなかった。ここ 10 年の間に、ハイダ語の文法記述や辞書 (John Enrico: *Haida syntax*, The University of Nebraska Press, 2003 年や同: *Haida dictionary: Skidegate, Masset, Alaskan dialects*, Alaska Native Language Center, 2005 年) が出版されるに及び、ハイダ語の記述研究に長足の進歩がみられたが、そこで記述されているハイダ語は、現在の話者の一世代前のものであり、現在の話者からみると、事実と食い違うところも多々ある。また、ハイダ語の継続的な記述に携わっている研究者は、ごく僅かであり、特に日本語との類似が指摘されているにも拘わらず、日本人研究者は、本研究代表者以外はいないのが現状である。

本研究代表者は、1991 年よりハイダ語の記述研究を始め、まず音韻面においては、声調と音節構造の間にある一定の関係を明らかにした上で、声調は、基底レベルで個々の形態素に指定されるものではなく、その現われは、音節構造から予測可能であることを指摘した。また、形態面においては、ハイダ語の言語類型論的な特徴のひとつである複統合性に着目し、特にそれが顕著に現われる動詞複合体を構成する様々な要素の機能の記述を行ってきた。

しかしながら、ハイダ語の言語事実の全体を解明するにはまだ程遠く、明らかにすべき事象を多く残しているのも事実であった。例えば、ハイダ語は、言語類型論的に活格タイプに分類されるが、それを特徴付ける動詞の意味については、まだ十分な理解に達しておらず、また、動詞複合体を構成する個々の要素の機能などについても更なる研究が必要であった。こうした実情を背景としながら、それらの点を一層深化すべく、本研究課題を開始するに至った。

## 2. 研究の目的

上に述べたような背景をもとに、ハイダ語文法の包括的な記述に向けた取り組みへのひとつの足がかりとして本研究課題を位置づけ、以下のような目的をもって、研究を実施した。

(1) ハイダ語の言語類型論的な特質を考察する。すなわち、

① 言語類型論的に活格タイプと考えられているハイダ語において、その特徴が如何に顕現するかという実際の言語事実を記述し、その現われに大きく関与する動詞の意味特

徴を明らかにする。

② ハイダ語の言語類型論上のもうひとつの大きな特徴としてあげられる複統合性について、その特徴が顕著に現われる動詞を形成する様々な要素の機能を明らかにするとともに、個々の要素の自在性についても検討を加える。

(2) ハイダ語が近い将来に消滅する可能性が極めて高い現状を鑑み、現地のハイダ語教育と保持の運動に資するよう、研究成果を還元していく方途を探る。

(3) 20 世紀初頭になされたハイダ語の資料を整備し、およそ 100 年の間にハイダ語が蒙った構造的変化を探るための基礎的な作業を行なう。

以上の目的をもって本研究を行なった。

## 3. 研究の方法

本研究課題は、何をおいてもまず現地調査によってハイダ語の言語資料を得ることが必要である。調査は、研究期間の毎年度においておよそ 1 ヶ月、ハイダ語が話されるカナダのブリティッシュ・コロンビア州クイーン・シャーロット諸島スキドゲイトに滞在し、そこで話されるスキドゲイト方言の話者数名の協力を得て行なった。現地調査においては、質問応答方式に加え、自由発話によるテキストの蒐集を中心に行ない、蒐集したテキストは、今後の研究の基礎資料とし得るよう、分析とデータベース化を図った。

更に、現地調査以外に、ハイダ語の構造的変化を探るための基礎資料とすべく、20 世紀初頭になされたハイダ語の資料を整理した。

## 4. 研究成果

(1) 本研究課題による成果は、大略以下のようにならされる。

① 活格タイプとしてのハイダ語の特徴

ハイダ語の言語類型論上の顕著な特徴のひとつに活格タイプであることがあげられる。活格タイプの言語に共通してみられる特徴として、自動詞の主語 (S) となる名詞句が他動詞主語 (A) と同じ格標識をとる場合と他動詞目的語 (O) と同じ格標識をとる場合に分かれ、自動詞主語が二通りの格標識をとり得ることから、分裂自動詞性を有することがあげられる。ハイダ語は、基本的に名詞句における格標識がない (つまり、名詞が曲用しない) 孤立的な言語であるが、人称代名詞は、二通りの格の区別がある。ただ、その格の区別も 1 人称単数と複数、2 人称単数にしかなく、従って、ハイダ語において分裂自動詞性が顕在化するのもそれらの人称と数に限られる。

人称代名詞がとる格によってハイダ語の

自動詞を分けると、a) Aと同じ格を要求する動詞（例えば、「走る」「歩く」「踊る」など）、b) Oと同じ格を要求する動詞（「大きい」「よい」[形容詞的概念は、ハイダ語では動詞に属する]「汗をかく」など）、c) AとOのいずれでも可とする動詞（「吐く」「倒れる」「愛する」など）の3つのグループに分けることができる。

個々の動詞が上記3つのいずれのグループに入るかは、[動作性]と[制御性]という2つの意味特徴によって記述することができる。[動作性]を有する動詞は、ある行為を行なう、あるいは、状況を引き起こす参与者をその主語として要求し、一方、[制御性]は、その動詞の表わす行為あるいは状況を制御することができるか否かを示す。これら2つの特徴を用いて、上記3つのグループの動詞を大まかに示せば、a)の動詞は、[+動作性、+制御性]、b)の動詞は、[-動作性、-制御性]、c)の動詞は、[+動作性、±制御性]もしくは[-動作性、±制御性]と記述することができる（厳密に言えば、c)の動詞は、更に2つのグループに分けることができる。[±]は、随意的であることを示す）。

これらの動詞のグループは、例えば、a)グループとb)グループでは、使われる代動詞が異なるという共通の統語的ふるまいが指摘できるが、基本的に動詞の意味特徴が分裂自動詞性を決定する最も大きな要因と考えられる。いわば意味という比較的不安定な要素を人称代名詞の格の選択の主たる決定要因とするために、話者によって、選択される人称代名詞の格が異なることがあり得る。更に、活格タイプとみられる言語間において、Aと同じ格を要求する動詞のグループとOと同じ格を要求する動詞のグループがそれぞれ一致しないのは、まさに分裂自動詞性が専ら動詞の意味特徴によって決まるゆえであると考えられる。

## ②ハイダ語における複統合性

ハイダ語のもうひとつの顕著な類型論的特徴として、複統合性があげられる。ここでいう複統合性とは、ひとつの語を構成する際に用いられ得る形態素の多寡をいい、実際、ハイダ語においては、特に動詞に付加される接辞の種類が多く、時として、多くの接辞が動詞語根に付加されて複雑な動詞複合体を形成することがある。

しかし、ハイダ語は、付加される接辞の上限が決まった、いわゆるスロット型言語である。スロットは、同じ語における接辞の共起可能性（範例的關係）と接辞同士の意味的な共起可能性（統合的關係）の2つの基準によって、接頭辞に3つ、派生接尾辞に7つ、語尾に7つをひとまず想定することができるが、スロットの数に関していえば、派生接尾辞に立てられるスロットの数、更に、そのスロ

ットに属する接尾辞の種類は、先行研究と食い違う点がみられる。また、接尾辞の中には、承接順序が比較的自由なもの（例えば、動詞語根に修飾を加える副詞的概念を表わすもの）があり、そうした自由度は、その接辞の機能と関係があることが考えられる。

ひとまず、ハイダ語には合計17のスロットがあり、それだけの数の接辞がひとつの語根に付くと考えられるが、実際には、スロット間の意味的な制約、すなわち、それぞれのスロットに属する接辞間の統合的關係による制約が働くので、動詞語根に付き得る接辞の数は、それほど多くなく、テキストにおいても、複雑な構造をもった動詞複合体が現われる頻度は、高くない（勿論、話者による程度の差はある）。また、個々の接辞に関しても、比較的多くの接辞と結びつき得るような自在性が高いものと、共起する接辞に限られるような自在性が低いものがあり、その違いがまた動詞の統合度の高低を決めると考えられる。

このように、スロットの数の多さは、確かに統合度の高さと結びつくものであるが、一方では、スロット間の統合的關係や接辞の自在性は、逆に統合度にある種の制約を加えるものとも見做し得る。ハイダ語の複統合性は、この2つの要因が大きく与っていることが指摘できよう。

## ③ハイダ語保持への取り組み

上に述べたように、ハイダ語は、話者が少数の高齢者に限られ、その保存と普及の取り組みが現地で行なわれているが、文字言語としての習慣がなかったハイダ語を普及させる上で最も重要な役割を果たすのは正書法である。

ハイダ語においても正書法が作られ、徐々に定着しつつあるが、しかし、文字の使い方、分かち書きの問題など、改善すべき点も少なくない。ハイダ語の姿を正確に捉え、かつ、その姿をできるだけ忠実に再現できる正書法に向けた改良が必要であり、それに向けた検討を行なった。

## ④ハイダ語資料の整備

20世紀初頭になされたハイダ語の資料（未公刊のものも含む）は、単一言語使用者、もしくは、おそらく英語の影響をあまり受けたことのない話者による発話を記録している点において、今日でも貴重な価値を有する。しかし、当時十分な言語学的な訓練を受けたことのない民族学者によってなされた記述であるために誤謬が多く、そのままの形で利用することはできず、必要に応じて、音声表記、分析、訳などのあらゆる面において再検討することが必要である。これらの資料は、現在のハイダ語とは、およそ100年の時間の隔りがあるが、その間に受けたハイダ語の構造的変化を探る重要な鍵を提供し得る。本

研究課題では、それらの資料の整備の基礎的作業を行なった。

## (2) 研究成果の意義と今後の課題・展望

### ①ハイダ語の記述

本研究課題によって得た成果の意義は、まず、言語類型論的にみて活格タイプとみられるハイダ語において分裂自動詞性を決める動詞の意味特徴として[動作性]と[制御性]の2つが関与することを指摘し、更に、そのそれぞれの意味特徴が如何なるものであるかを記述した点があげられる。また、活格タイプに内在する一般的な問題を指摘した点も意義あるものと考えられる。これらの成果は、国内の一般向けの雑誌や学会でその梗概を公表し、更に、査読付きの学会誌に発表したことにより、一定の評価を得たと考えている。しかし、自動詞節における主語となる人称代名詞がAとOのいずれの格で現われるかをみるには、動詞の意味的な面だけでなく、おそらくそれと相関する統語的な面についても考察する必要がある。更に、従属節における人称代名詞の格の選択も観察しなくてはならない。加えて、ハイダ語を活格タイプの諸言語の中にもどのように位置づけるかという、通言語的な考察が十分であるとは言い難く、今後は、ハイダ語の個別的な面での記述の深化と一般的な枠組の中での位置づけを図らなくてはならない。

更に、言語類型論的な特質として、ハイダ語の複統合性をとりあげ、特に、スロットの数とスロット同士の統合関係を主たる指標として複統合性の問題に関する考察を深めたのも本研究課題による成果の意義として指摘しなくてはならない。今後は、特に、接辞を自在性(すなわち、他の接辞との共起可能性)の観点からより詳しく記述し、また、個々のスロットに属する接辞の機能を一層明らかにすることなどを継続的な課題として研究を進めるつもりである。加えて、複統合性を有する他の言語との対比を通じて、ハイダ語のもつ複統合性の特質を浮かび上がらせるなど、通言語的な研究も視野に入れることも考えている。

また、過去になされたハイダ語の資料の整備は、今後も継続して行なっていく必要があると考える。

### ②ハイダ語の保持

本研究課題で得られた成果は、将来的にハイダ語の学習用の文法書などに反映させることを考えており、その点からすれば、ハイダ語の将来に対する本研究課題の意義は大きいといえる。また、正書法に関していえば、言語学的に妥当な分析に基づきつつ、如何に実用性を備えたものを作り出していくかを考察することは、今後の大きな課題として残される。

本研究課題に限らず、研究代表者による長

年の継続的なハイダ語の研究に対しては、現地の言語教育関係者なども高い関心を寄せており、その成果を実用面にも活かせるような方途を今後も探っていくなくてはならないことを痛切に感じている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

①堀 博文, 理想の正書法に向けて—ハイダ語(北米先住民諸言語)の場合, 『アジア研究』第3号, pp. 1-20, 静岡大学人文学部「アジア研究プロジェクト」, 2008年, 査読なし.

②Hori, Hirofumi, Semantic motivations for split intransitivity in Haida, 『言語研究』第134号, pp. 23-55, 日本言語学会, 2008年, 査読あり.

③堀 博文, 私のフィールドノートから⑦ハイダ語, 『月刊言語』第36巻第7号, pp. 88-93, 大修館書店, 2007年, 査読なし.

[学会発表](計2件)

①Hori, Hirofumi, The Haida language viewed from the standpoint of Japanese, 8<sup>th</sup> International Haida Language Gathering, Haida Heritage Centre (Skidegate, Canada), 2009年4月20日

②堀 博文, 活格性とはなにか?: フィールドから見えてくる言語の多様性 Part 2: ハイダ語(北米先住民諸語)と活格類型論, 日本言語学会第134回大会, 麗澤大学, 2007年6月16日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

堀 博文 (HORI HIROFUMI)  
静岡大学・人文学部・准教授  
研究者番号: 10283326

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし